

ロランス・カンパ
「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ
—モーリス・ジュヌヴォワと第一次世界大戦の作家たち—」

浅 間 哲 平

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第19巻第1号(2020年9月)抜刷

【翻 訳】

ロランス・カンパ
「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ
—モーリス・ジュヌヴォワと第一次世界大戦の作家たち—¹」

訳者：浅間 哲平

2020年11月11日、作家モーリス・ジュヌヴォワがパンテオンに入ります。パリのサント＝ジュヌヴィエーヴの丘に位置するこのモニュメントは、大革命以来フランスの共和的・愛国的価値を擁護し、国家のアイデンティティを確立するのに貢献した偉大なる男女を祀ってきました²。パンテオンに最初に入れられたのは、啓蒙主義を唱えた哲学者たちです。ヴォルテールは1791年に、ルソーは1794年に、遺灰がパンテオンに移されました。パンテオンには雄弁家、政治家、科学者、レジスタンス活動家たち、そして第二次世界大戦で強制収容所に送られた人々が埋葬されていますが、そのかわりに多くの有名作家たちが永眠しているのです。寛容や民主主義のために戦ったことで知られるヴィクトル・ユゴー、エミール・ゾラ、アンドレ・マルローなどです。モーリス・ジュヌヴォワは兵士として第一次世界大戦に参加し、ムーズ県で負傷しました。その後、4巻、800頁におよぶ物語を書くこととなります。そのタイトルは、『14年の人びと』といます。1914年8月の開戦から1915年4月の負傷まで、ジュヌヴォワは日記をつけていました。この証言は1916年から1923年までの間に5巻に分けて出版されましたが、現在知られているタイトルのもと、第二次世界大戦後の1949年に再出版されました³。

慣例では、パンテオン入りを決める特権はフランス大統領のものです。エマニュエル・マクロンはジュヌヴォワをパンテオンに入れると、第一次世界大戦の終戦百周年を記念する巡回中、2018年11月6日に発表しました⁴。象徴的なことに、この宣告はムーズ県のレ・ゼバルジュで表明されています。ドイツ人作家のエルンスト・ユンガー

1 [本稿は、ロランス・カンパ氏（パリ・ナンテール大学教授）が2019年10月28日に静岡県立大学で行った講演の全訳である。講演の詳細については、訳者解題を参照してほしい。[] で括られた文章は訳者による註。

2 モニュメントのペディメントには「感謝せる祖国、偉人たちにこれを捧ぐ」という銘が刻まれている。

3 最初に発表された各巻は『ヴェルダン戦線』（1916）、『戦争の夜』（1916）、『塹壕の入口で』（1917）、『泥』（1921）、『レ・ゼバルジュ』（1923）と題されていた。1949年に出版された『14年の人びと』は『塹壕の入口で』を他の巻に統合し、このタイトルは消えることになった。[Maurice Genevoix, *Ceux de 14*, Préface par Michel Bernard, Paris, Flammarion, coll. « GF », 2018].

4 式典は、当初は2019年11月11日に予定されていたが、テクニカルな理由から直前になって延期された。

が『鋼鐵のあらし』で語っているように、彼が初めて負傷したのもこの場所でした⁵。同日の1915年4月25日、ジュヌヴォワは同じように負傷し前線から救出され、結果として彼は作家になりました。実はジュヌヴォワのパンテオン入りというアイデア自体は新しいものではなく、10年ほど前から、作家の家族や「14年の人びとを記憶しよう」というアソシエーションによって提案されてきました⁶。しかし、前任の大統領であったニコラ・サルコジもフランソワ・オランドも2013年に議論となったこの計画を実現するには至りませんでした。確かにたった一人の著名人を顕彰の対象とするのは問題含みではあります。国家の枠を超えて戦争を総合的に検証しおびたしい戦死者をだした原因を究明しようとする歴史学がよしとされる現在にあって、ある種の偉人崇拜へ退行することに等しいのではないかということです。さらに、犠牲になったフランス人と作家たちを象徴する場所は既に存在しているという問題もあります。凱旋門の下に1920年11月11日に設置された無名戦士の墓がありますし、1914年から1918年にフランスのために死んだ作家の名前は、文藝家協会によって、パンテオンのプレートに記されていて、そこにはシャルル・ペギー、アラン＝フルニエ、そしてギヨーム・アポリネールの名前があるのですから⁷。

では、なぜジュヌヴォワをパンテオンに入れるのでしょうか？ この政治的選択を文学史と文化史の観点から考えてみましょう。そうするためには、フランス人が「第一次世界大戦 (Première Guerre mondiale)」という呼び方よりも「大戦争 (Grande Guerre)」と呼ぶほうを好むという事実を踏まえ、そこに文学が関係していることを想起しなければなりません。

なにをおいても、次のことを確認しておくのが適切でしょう。つまり、第一次世界大戦とは書かれた戦争であるということです。100年もの間、この戦争はあらゆる種類の書物によって主題とされてきました。それまでの戦争と比較すれば明らかのように、当初から、この戦争は言葉にされてきたのです。家族は離れ離れになり、郵便料金は免除になっていたので、フランス人は非常に多くの手紙をやりとりしました。教育の水準が以前よりも向上し、人々は正しいフランス語を書き、それぞれの経験をノートや日記に記しました。読者はたとえば、現実に忠実な証言に飢えていました。新聞はプロパガンダを垂れ流し、情報は検閲によって削除されていたからです。出版社は読者の要望に応えようと、新しいシリーズを打ち出し、出版物を増やしていきました。

ジュヌヴォワはまさしくこのような現象の只中にいました。高等師範学校の学生だった作家は、1914年8月、24歳のときに少尉として動員されました。負傷して兵役免除になった彼は、学校の書記官であったポール・デュピュイに自分のノートを見せ、こ

5 [エルンスト・ユンガー、『鋼鐵のあらし』(佐藤雅雄訳)、先進社、1930年]。

6 [このアソシエーションによる以下のサイトを参照。https://ceuxde14.wordpress.com/]

7 戦時中の負傷によってその後死亡した作家も含まれる。例えば、イタリア人作家のリッチョット・カニュードなど。

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ」

の書記官の励ましもあって、1916年に出版社フラマリオンから本を出すことになるのです⁸。

1914年から1918年の間に出版された戦争ものに共通する特徴とはなんでしょうか。書店で成功をおさめた、例えば、ポール・ジェラルディの『戦争ですよ、奥様』⁹ もあれば、狭い範囲で流通したのものもあるわけですが、いくつかの共通点が見出せます。戦争ものはフィクションではなく、本当にあった物語として語られました。作者と語り手の距離は短くなり、ほとんどなくなっています。「私」という語り手は自分の経験だけではなく、その周囲の人々の経験についても証言するのです。この自伝的要素は真実を保証しようとするものです。思い出すこと、そして忘れないために書くこと、こういった必要性に答えるために物語は書かれたのです。そのため、小説というジャンルはべつのジャンルである日記やクロニクに近づいてゆきます。『砲火』は「ある分隊の日記」という副題がついていることを想起しておきましょう¹⁰。詩人で劇作家のジョルジュ・デュアメルは物語として『殉難者』(1917)と『文明』(1918)を書きましたが、二つの作品は前線での外科医としての経験を証言したものです¹¹。

エクリチュールの形式も同時に変化しました。現実には忠実であろうとすること、「人の背丈の高さで」語ろうとすること、このような目的のもと叙事詩というジャンルは廃れていきました¹²。戦闘の雄大さの描写、英雄の礼賛、観念のアレゴリー化といったことは避けられるようになります。これらは嘘や美化であると考えられたのです。物語は、写実的で、自然主義に近い方法で書かれました。平凡な兵士やひとりの将校を登場人物としたのです。くだけた言葉、隠語、方言の言い回しはそれまでいわゆる文学においては使われませんでした。大衆向けの作品や特定の地方に肩入れする作品にのみ用いられていたのです。しかし、これらの言語が作中の会話や語りのなかで使用されるようになってゆきます。

ジュヌヴォワの物語はこれらの特徴をすべて併せ持っています。ですから、ジュヌヴォワの物語は戦時とそのすぐ後に書かれた戦争文学を代表すると考えて差し支えないかもしれません。ところが、ジュヌヴォワの物語はまったく新しい文学ジャンルを創設したとも言えるのです。これを「第一次世界大戦文学」と呼んではどうかと私は考えています。このジャンルは、戦間期から今日に至るまで続いているのですが、その点については後で述べたいと思います。

8 Maurice Genevoix - Paul Dupuy, *Correspondance (28 août 1914 - 30 avril 1915)*, préface de Michel Bernard, Paris, La Table ronde, 2013.

9 Paul Géraudy, *La Guerre... Madame*, Paris, Crès, coll. « Bellum », 1916.

10 [アンリ・バルビュス、『砲火』(田辺貞之助訳)、岩波文庫、1956年]。

11 [ジョルジュ・デュアメル、『殉難者』(木村太郎訳)、創元社、1950年。ジョルジュ・デュアメル『文明』(和田伝訳、『新興文学全集』第17巻所収)、平凡社、1930年、277-334頁]。

12 ジャンルとしての叙事詩は、しかしながら、愛国詩と政治参加を志向する作品のなかで生き延びることになる。

1919年から、大衆は新しいページをめくり前進したいと望みました。しかし、戦争文学はなくなりませんでした。戦後すぐには出版された多くの小説は、かなえられることのなかった帰還、死者に対する喪の作業、そして復興について語りました。例えば、リュック・デュルタンの詩集『人間の帰還』(1920)やロラン・ドルジュレスの『死者の目覚め』(1923)が挙げられます¹³。ドルジュレスは、平和主義をかかげ今では古典となった『木の十字架』(1919)を書いた戦争作家です¹⁴。しかし、若きシュールレアリストたちは違いました。アンドレ・ブルトン、アラゴン、そしてポール・エリュアールなどそのうちの何名かは戦争に参加しましたが、年長者たちが世界を破滅に導いたと断罪し、戦争について語ることを拒否しました。戦争の宣伝は避けたいと考えたのです。その結果、根本的に新しい生活様式を採用し、さらにオートマティスムという方法によって書法も一変させました。

真実を述べよという命令の力は弱まり、フィクションはもとの状態に戻っていきました。ジャン・コクトーの『山師トマ』(1923)がよい例でしょう¹⁵。作家は、実際にイゼールで戦争に立ち会いましたが、この小説では戦場がフィクションと現実の入り混じる夢であるかのように描かれています。事実をゆがめることが許されるようになったのです。その結果、戦争は風刺や異議申し立ての道具としても用いられるようになりました。例えば、ルイ・ギューの『黒い血』(1935)では、銃後の民間人の生活に対する激しい風刺が見て取れます¹⁶。戦争はたいへん重い現実として受けとめられたのですが、文学がその権利をとりもどしていったのです。『失われた時を求めて』の最終巻『見出された時』(1927年に死後出版)ではいたるところに戦争が現れます¹⁷。爆撃されたパリの様子を語り手は観察するのです。マルセル・ブルーストは、小説『失われた時を求めて』に戦争を統合し、作品のなかできわめて重要な出来事として描き出したのでした¹⁸。

ジュヌヴォワの進んだ道も同じような流れにのってゆきました。1923年まで戦争ものを出版し続けますが、1920年からこの若き作家は小説に身を投じ、銃後の生活を描いた『ジャンヌ・ロブラン』を発表します¹⁹。1924年には、『喜び』で、兵士が日常生

13 [Luc Durtain, *Le Retour des hommes*, Paris, Éditions de la Nouvelle Revue française, 1920 et Roland Dorgelès, *Le Réveil des morts*, Paris, Albin Michel, 1923].

14 この小説は1919年にフェミナ賞を獲得し、1932年にはレイモン・ベルナル監督によって映画化された。[ロラン・ドルジュレス、『木の十字架』(山内義雄訳、『現代世界文学全集』第5巻所収)、三笠書房、1954年、265-456頁]。

15 [ジャン・コクトー、『山師トマ』(河盛好蔵訳)、角川文庫、1955年]。

16 [Louis Guilloux, *Le Sang noir*, Paris, Gallimard, coll. « Folio », 2019].

17 [マルセル・ブルースト、『見出された時』(鈴木道彦訳)、集英社文庫、2007年]。

18 この作品が戦争によって受けた影響については以下を参照。Pierre-Louis Rey, « Ce que ne savaient pas les lecteurs de *Du côté de chez Swann* » dans *1913 : cent ans après. Enchantements et désenchantements*, sous la direction de Marie-Paule Berranger, Colette Camelin, Paris, Éditions Hermann, coll. « Colloque de Cerisy », 2015 ; Brigitte Mahuzier, *Proust et la guerre*, Paris, Champion, coll. « Recherches proustiennes », 2014 ; Luc Fraisse, *Proust et la stratégie militaire*, Paris, Éditions Hermann, 2018.

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ」

活に復帰する様を書きました²⁰。ところが、ジュヌヴォワもまた新しいページをめくりたいと望み、べつの道へと進み始めます。そのようなわけで、動物や自然に親しみ、自らの故郷であるロワール川周辺の景色を描き出しました。ソローニュ地方で気ままに生きる密猟者を題材にした小説『ラボリオ』（1925年のゴンクール賞受賞作）は、自然の生み出す美しさを歌いあげながらも、人が避けては通れない暴力というものを正面から扱っています²¹。この小説の描く猟の場面を読むと、人類学が強調する狩猟と戦闘の近さを思い出さずにはられません²²。また、べつの傾向の作品としては、『オリンピアの勝者エウテューモス』（1924）があり、そこでは競争心、平和、友愛という主題をオリンピックというひとつの理想を通して語りました²³。

時が経つと戦争に対する作家たちの距離は増していきました。1930年代には、第一次世界大戦はそれだけで扱われる主題というよりは、社会や政治を分析するための一要素として取り上げられるようになります。1929年の恐慌の後、ナチズムとファシズムの勃興が近づいていたのです。多くの作家は、平和主義者として、戦争を清算しました。ジャン・ジオノがよい例で、『大群』（1931）には、激しい告発が見出されず²⁴。ほかの作家は、より分析的に過去の経験とかつての過ちを判断し、迫りつつある危機を予告しました。第二次世界大戦に入る直前には、ジュール・ロマンやロジェ・マルタン・デュ・ガールが、大河小説によって先の大戦を扱っています²⁵。

1940年代からは第一次世界大戦はこれまでとは異なり影がうすくなってゆきます。ドイツ人によるフランス占領と第二次世界大戦はもう一つの戦争の輝きを奪ってゆくのです。ところが、1950年代に元兵士の経験をよみがえらせようと、フィクション、回想録、モニュメントという形で第一次世界大戦という主題が復活してきます。ブレイズ・サンドラールの『切られた腕』（1946）がその早い例として挙げられます²⁶。ところが、ジュヌヴォワが担う使命はもっと独特なものでした。かつての兵士たちの存在価値が明らかになった今、戦争ものを一つの書物にまとめることで彼らのためのモ

19 [Maurice Genevoix, *Jeanne Robelin*, Paris, Flammarion, 1920].

20 [Maurice Genevoix, *La joie*, Paris, Flammarion, 1924].

21 [Maurice Genevoix, *Raboliot*, Paris, Librairie Générale Française, coll. « Le Livre de Poche », 1989].

22 次の文献を参照。Stéphane Audoin-Rouzeau, *Combattre*, Paris, Éditions du Seuil, coll. « Les Livres du nouveau monde », 2008.

23 1960年に『オリンピアでの勝利』と改題された。[Maurice Genevoix, *Vaincre à Olympie*, Paris, Union Générale d'Éditions, coll. « 10|18 », 1969].

24 [Jean Giono, *Le grand troupeau*, Paris, Gallimard, coll. « Folio », 1992].

25 ジュール・ロマンの『善意の人々』（1932-1946）の第15巻『ヴェルダンへの序曲』（1938）と第16巻『ヴェルダン』（1938）、そしてロジェ・マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』（1922-1940）の『14年の夏』（1936）と『エピローグ』（1940）を参照。[ジュール・ロマン、『ヴェルダン』（山内義雄訳、『現代世界文学全集』33巻所収）、新潮社、1958年。ロジェ・マルタン・デュ・ガール、『チボー家の人々』（山内義雄訳）、白水社、1956年、3-5巻]。

26 [Blaise Cendrars, *La main coupée*, in *Œuvres autobiographiques complètes*, t. I (édition publiée sous la direction de Claude Leroy avec la collaboration de Michèle Touret), Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2013, p. 525-801].

ニュメントを建立しようというのです。各種メディアで証言したり、戦場での記念行事に出席したりと、彼が「記憶への熱意」を抱き続けるのも同様の目的があつてのことなのです²⁷。確かに、冷戦、脱植民地化にまつわる闘争（インドシナとアルジェリアにおける闘争）、アメリカによるヴェトナム戦争、1968年5月の運動、これらは新しい世代の視線を第一次世界大戦から逸らしていきました。また文学そのものに関わるある種の流行も、作品から第一次世界大戦という現象を締め出していったことも認めなければなりません。作品が現実を反映していると考えるのは幻想に過ぎないというヌーヴォー・ロマンの主張、話し言葉の権威に対する疑義の提唱²⁸、テル・ケル派の形式主義、「白いエクリチュール」への支持²⁹などがそのような追放に関わりました。

1990年代からは、文学は物語へ回帰し、歴史は文化史の影響で刷新されました。その結果、改めて第一次世界大戦は注目されるようになり、文学における存在感が増しました。これは「百周年の効果³⁰」と言ってよいでしょう。生存者の証言が少なくなる一方で、このジャンルの文学は活況を呈しています。そこで扱われるのはなによりも死や喪のトラウマであり、破壊であり、身体の損傷であつて、それが心理に与える影響です。戦争を嘆くのであれ反対するのであれ、このジャンルの文学は平和主義を貫いています。暴力、苦悩、犠牲が強調され、戦争が引き起こす連帯精神や服従拒否を重視しています。これらの作家たちはこれまでほとんど聴き取ることのできなかつた声に語らせ、女たち、子どもたち、動物、傷痕軍人、顔面負傷兵などをとりあげています。

現代の作家たちは、証言者として語ることはしません。それぞれの関心にしたがつて、戦争を描いてゆくのです。家系、家族の記憶、アイデンティティ、歴史の重みなどが注目されています。例えば、ジャン・ルオーの『名誉の戦場』（1990年のゴンクール賞受賞作）が挙げられますが、この小説は文学というジャンルが第一次世界大戦に対して示すアプローチを刷新した作品と言ってよいかと思えます³¹。戦争を直接に体験していないこれらの作家は、戦争を経験した人たちの子孫ともたいした関係をもっていないこともしばしばですので、資料をふんだんに用います。歴史的資料やアーカイブを活用しているのです。要するに、彼らは歴史小説を書いているのではなく、歴史とともに書くというスタイルをとっていると言えるでしょう。彼らはまた先行する文学作品を読み、そこから影響を受けています。そしてこれまでまかり通つてきた神

27 次の書物にジュヌヴォワの演説や記事がまとめられている。Maurice Genevoix, *La Ferveur du souvenir*, édition établie et présentée par Laurence Campa, Paris, La Table ronde, 2013.

28 [ジャック・デリダ、『根源の彼方に—グラマトロジーについて』（1967、足立和浩訳）、現代思潮社、1972年]。

29 [ロラン・バルト、『エクリチュールの零度』（1953、森本和夫・林好雄訳）、ちくま学芸文庫、1999年]。

30 2013年のゴンクール賞はピエール・ルメートルの『天国でまた会おう』に授与された。この作品は、戦争が個人や社会に与えた傷を主題としている。2017年に映画化され、人気を博した。[ピエール・ルメートル、『天国でまた会おう』（平岡敦訳）、ハヤカワ・ミステリ文庫、2015年、上下巻]。

31 [ジャン・ルオー、『名誉の戦場』（北代美和子訳）、新潮社、1994年]。

話や紋切型から距離をとっていることもその特徴として挙げられます。例えば、ジャン・エシュノーズの『1914』(2014)という小説がよい例でしょう³²。また私自身が2017年に『月下の鳩』という小説を書きました³³。そこでは、第一次世界大戦を単なる舞台としてではなく、普遍的意義への橋渡しとなるような風景として描きました。知識をつめこんで作品にするのではなく、私たちの存在そのものを問うような経験を想像力によって造り直し、共有したかったのです。人はどのようにして大人になるのか。私たちの人生における夢とはなんなのか。幻想はなんの役に立つのか。そういった問いを出発点としました。

まとめると、この100年間、フランス文学と第一次世界大戦はお互いに影響し合ってきました。経験し、伝えられ、語られた戦争は、文学に影響を与えてきました。文学とは言えば、やはり戦争に影響を与えてきました。戦時下、文学は否定できない形で社会的・文化的役割を担ってきたのです。そして、文学は戦争を表現することに寄与し、集団的記憶に一種のレパートリーを提供してきました。文学作品はさらに文化の伝達にも一役買ったという事例も付け加えておきましょう。ギヨーム・ミュレルの博士論文は、その役割を明らかにしました。第一次世界大戦のときに兵士として参加した作家たちが日本語に翻訳され、特にエーリッヒ・マリア・レマルク、アーネスト・ヘミングウェイ、アンリ・バルビュスの作品が知られるようになり、日本人作家のヒューマンイズムと平和主義に影響を与えていたのです。これらの翻訳が1937年から1945年の日本の「戦争文学」において作家の発言を正当化する根拠となっていたわけです³⁴。

最後に、ある種の第一次世界大戦文学は記憶と忘却を経て、歴史の他の地点に至ったという事実を紹介しておきたいと思います。1915年と1917年のゴンクール賞受賞作であるルネ・バンジャマンの『ガスパール』とアンリ・マレルブの『炎を手』はまったく読まれなくなっていました³⁵。それは二つの作品が軍国主義的で、もっと言ってしまえば好戦的だったからです。さらに、1940年から1944年の間、ドイツの占領に積極的にかかわったこの二人は、1945年以降この選択を理由に暗闇に葬られたのです。

結論に入るために、モーリス・ジュヌヴォワのニュースに戻りたいと思います。この作家は確かに第一次世界大戦を経験した他の作家と多くの共通点を持っています。しかし、ジュヌヴォワはこの時代を代表する作家とは言えないでしょう。この作家の選んだ道は非常にはっきりとしています。異議申し立てや服従拒否に反対して、ジュヌヴォワは義務の美德を唱えました。司令官と部隊の争いに反対して、下級将校とそ

32 [ジャン・エシュノーズ、『1914』(内藤伸夫訳)、水声社、2015年]。

33 [Laurence Campa, *Colombe sous la lune*, Paris, Stock, 2017].

34 Guillaume Muller, *La Littérature de guerre japonaise de 1937 à 1945*, sous la direction d'Anne Bayard-Sakai, INALCO, 2018.

35 [René Benjamin, *Les Soldats de la guerre*. Gaspard, Paris, Fayard, 1915 et Henry Malherbe, *La Flamme au poing*, Paris, Albin Michel, 1917].

の部下の交流を擁護しました。陳腐なヒロイズムや行き過ぎた犠牲根性に反対して、明晰でかつ広く認められた愛国心の尊厳を描きました。独裁主義や暴力の爆発に反対して、人々に対する憐憫、生者に対する配慮、人生への愛惜を表現したのです³⁶。

マクロン大統領は、第一次世界大戦について国民全員が一致団結できるような解釈を与えようとしているとまづは言えるでしょう。大統領は、1914年のフランスに見られた神聖なる団結³⁷を強調しています。この神聖なる団結は神話として人々に語り継がれており、2015年のテロのときのようにフランスが脅威にさらされた折には未だ有効な概念であるということが証明されました。

二番目に、マクロン大統領は、フランスの武勲詩の流れのなかに「14年の人びと」を位置づけようとしています。これは大革命と共和暦2年の兵士たちから始まり³⁸、1830年と1848年の革命を経て、1870年の普仏戦争に至り、さらにレジスタンスや正義の人の活動³⁹へと行きつくものです。大統領は、こうして、ジュヌヴォワを通して戦争を経験したすべての民衆を顕彰しようとしているのです。顕彰されるのは「一兵卒、将校、志願兵、召集兵、職業軍人、階級のない兵士、元帥 [だけではありません]、軍人たちとともに志願した女性たちです。というのも、14年の人びとには、女性たちも含まれるのですから⁴⁰」。マクロン大統領は、第一次世界大戦が総力戦だったという歴史的事実を考慮に入れているのですが、さらにこれは男女平等を目指すフェミニストの要請にも応えるものになっています。集団を対象とした顕彰となる今回⁴¹、モーリス・ジュヌヴォワは、彼とともに第一次世界大戦を経験したすべての民衆、そして、その子孫たちをパンテオンに入れるわけです。対象者は今日のフランスの大半を占めることになるというわけです。

三番目に、国をあげての顕彰は、古典様式に価値を与えるものと考えられています。ジュヌヴォワは高等師範学校で教育を受け、古典作品を読み、19世紀文学によって育ちました。それはモーパッサンのリアリズムについての論文や彼の小説『オリンピアの勝者エウテューモス』によって証明されています。彼の言語は、明晰で節度があり、バランスがよく読みやすいことでモデルとなります。そして華々しきやユーモア、精

36 この感情こそがジュヌヴォワの全作品を貫くものであり、それは『ジャンヌ・ロブラン』、『ラポリオ』、『寓話集』(1969-1974)に確認できるものである。[Maurice Genevoix, *Jeanne Robelin*, *op. cit.*; *Raboliot*, *op. cit.*; *Maurice Genevoix illustre ses Bestiaires*, Paris, Plon, 1972].

37 [1914年8月4日に大統領レイモン・ポワンカレが全フランス人にイデオロギーの対立を超えて団結するよう呼びかけたときの言葉]。

38 1914年から1918年までも同じような現象が見られた。[1793年に徴兵された兵士たちは、彼らの力によって国土を侵略してきた敵を追いやり祖国を防衛したということで、その愛国的行動が神話化された。カンパ氏は、第一次世界大戦時にもそのイメージが多用されたという事実を指摘している]。

39 ショアーからユダヤ人を救った人々のことをこのように呼ぶ。

40 2018年11月6日のマクロン大統領による演説より引用。

41 2007年にフランスにおける正義の人をパンテオンに入れたという先例はあるものの、次の11月11日に対象となる人々は規模の点で大きく異なる。[「フランスにおける正義の人」のパンテオン入りを記念して行われたジャック・シラクによる演説が日本語で読める。ジャック・シラク、『フランスの正義、そしてホロコーストの記憶のために』(松岡智子監訳/野田四郎訳)、明石書店、2017年、107-118頁]。

彩さにもこと欠きません。それは『ラボリオ』や『猪』⁴² からうかがい知ることができるのです。そのようなわけで、長い間、彼の文章は教育の現場でモデルとされてきました。1946年にアカデミー・フランセーズに入会したこの作家は、田園小説家として、軍人社会の擁護者として、ドゴール元帥の友人として知られてきました。政治の世界では右派に位置づけられるわけです。

最後に、大統領の計画は一冊の本をパンテオンに入れることを目指すものであり、これは今までになかったことです。この点こそがもっとも新しいことと言えるでしょう。ジュヌヴォワの本は、確かに、フランスのすべての戦争文学を代表するわけではありませんし、戦時のフランス人のさまざまな経験すべてを代表しているわけでもありませんが、典型的であることを求められているわけではないのです。この作家を聖別することは、ヴォルテールやマルロー、そしてユゴーを国家と結びつける伝統に連なるものです。ジュヌヴォワはフランスの記憶と遺産のなかで文学が特権的な地位を占めていることを改めて認識させてくれるのです。

ジュヌヴォワのそれ以外の作品が「古びた」と考えられているのに対して、『14年の人びと』は第一次世界大戦を描くフランス文学のなかで類を見ないものとして読者を惹きつけ続けています。真実にとことんこだわり、生者と死者の連帯に気を配るこの作品は、その雄大さ、リズム、そして雰囲気によって、正義、誇り、感動を呼び起こすのです。経済学者で文筆家のベルナル・マリスは、エッセイ『戦争における人間 モーリス・ジュヌヴォワ対エルンスト・ユンガー』でたいへん成功を収めました。そのなかで『14年の人びと』は「フランス人にとってのイーリアス」なのだと言っています⁴³。このジュヌヴォワの作品は、高尚な形式で世界を歌い上げる叙事詩ではないとしても、大勢の人間がそのなかに自分を認められることから政治的な対立を乗り越えることをも可能にする偉大なテキストであるというのです。

本講演を締めくくるにあたって、個人的な思い出を語りたいと思います。先ほど触れたベルナル・マリスは、思想的には左翼で、自由闊達な精神をもち、寛大な友でしたが、2015年1月「シャルリ・エブド」紙の事務所を襲ったテロにより亡くなりました。私から見て、そして皆さんも同意して下さると思いますが、彼は率直さ、寛容さ、誠実さを絵に描いたような人物でした。2008年に、共通の友人である作家のミシェル・ベルナルを介して、彼と出会い、そして彼の妻シルヴィ・ジュヌヴォワと知り

42 『猪』は16世紀の宗教戦争の時代に「災禍の多い悲惨な」ドイツ占領時代を重ね合わせる。1946年に出版され、1979年に『赤い丘』というタイトルで再版されたこの小説はルネサンス時代の俗語が多用されている。[Maurice Genevoix, *La Motte rouge*, Paris, Éditions du Seuil, 1979].

43 批評家で元兵士のジャン・ノルトン・クリュが発表した『証言者』(1929)では、ジュヌヴォワは「もっとも偉大な戦争画家」と評されている。この研究は、元兵士が残した数百の著作が真実であるかどうかを検証しようとするもので、真実の名のもとに文学というジャンルそのものを無効なものとする。ここでは、ジュヌヴォワは現実に忠実であろうとするために文学的「才能」を利用したとされた (Jean Norton Cru, *Témoins*, Nancy, Presses universitaires de Nancy, 1993, p. 142-154).

44 [Bernard Maris, *L'homme dans la guerre. Maurice Genevoix face à Ernst Jünger*, Paris, B. Grasset, 2013].

合いました⁴⁵。作家モーリス・ジュヌヴォワの娘にあたる人です。彼らのおかげで、私はジュヌヴォワ家の人々、アソシエーション「14年の人びとを記憶しよう」の会員、そしてたくさんの熱心な読者たちと交流することになりました。ジュヌヴォワの存在感やそれによって生まれる連帯の意識は、意見交換と交流活動を通して育まれる熱のこもった彼らとの友好関係のなかに息づいており、オルレアン近郊にあるジュヌヴォワの家（ヴェルネルと呼ばれる）でいつも感じられるものでした。それは、ベルナール・マリスの情熱のなかに見出されるものと同じものです。残念ながら、彼の精神は蒙昧なるテロリストにより抹殺されてしまいました。2015年パリのバタクラン地区にある「シャルリ・エブド」紙事務局において起きた事件と同じことが、2017年ロンドンのバラ・マーケットでも、そしてフランスやヨーロッパのほかの多くの場所で次々と起こり、有名無名の犠牲者が出ました⁴⁶。

モーリス・ジュヌヴォワはいかなる記念行事も現在を「改良する」ものではないことを理解していました。それでも真実、連帯、平和を信じ、「良質の」人間関係こそが信頼と賛意を勝ち得ると疑わなかったのです。謙虚な人でしたから、彼は自分の作品が国家の顕彰の対象となるとは想像もしなかったでしょう。しかし、彼は自分の本が生き続け、そこに読者が自身の姿を見出すことになると信じて疑わなかったと思います。

来る11月11日、どのような形でこの敬意が表され、そこで文学がどのような位置を占めることになるのか、私にはまだわかりません。しかし、『14年の人びと』が、さまざまな政治状況を乗り越え、絶えず脅かされている私たちの人間性を鍛えることに貢献するであろうと期待せずにはいられないのです。

45 次の書物を参照。Michel Bernard, *Pour Genevoix*, Paris, La Table ronde, 2007.

46 [2015年1月7日パリ11区バタクラン劇場近くにある「シャルリ・エブド」の本社にイスラム過激派テロリストが乱入し、編集長、漫画家、コラムニストらを殺害した。2017年6月3日ロンドンのバラ・マーケット付近でテロリストが数人を刃物で刺傷した。いずれもイスラム国が関わっているとされており、2010年代後半はヨーロッパにおいて同種のテロが繰り返された]。

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ」

訳者解題：モーリス・ジュヌヴォワを知っていますか？

本稿は、ロランス・カンパ氏（パリ・ナンテール大学教授）が2019年10月28日に静岡県立大学で行った講演《La Grande Guerre : un siècle de littérature française》の全訳である。今回の翻訳掲載にあたり、訳者からの依頼に応じて氏が改めて執筆した原稿を日本語に訳した。その際にタイトルも《À Ceux de 14 la Patrie reconnaissante — Maurice Genevoix et les écrivains de la Grande Guerre au fil du siècle —》と変更になった。

カンパ氏の講演の際、通訳を務めた訳者が話題の中心となるモーリス・ジュヌヴォワのいくつかの作品から抜粋を用意した。これを受け、カンパ氏は該当作品の朗読・分析を行った。その内容を今回の原稿に取り入れてもらった。また、講演後の談話の中で、カンパ氏とジュヌヴォワ家の交流について教えていただいた。その点についても今回の論考で触れるようにお願いした。原稿の後半で、カンパ氏が作家の娘と知り合った経緯について語っているのは、このような理由による。

ロランス・カンパ氏は20世紀フランス文学を専門に研究しており、第一次世界大戦下の詩人たちの活動についての研究書¹、ギヨーム・アポリネールの伝記²、ブレイズ・サンドラールの画像資料の編纂など³、主にフランス詩についての論考で知られている⁴。

ところが、講演のテーマの中心となっているのは上で述べたように小説家モーリス・ジュヌヴォワ（Maurice Genevoix）である。静岡での講演により、この作家がパンテオンに祀られるという文学史的事件をカンパ氏はいち早く日本に紹介してくれた⁵。

では、ジュヌヴォワとは何者なのか。パンテオン入りしている大作家たち（ユゴー、ゾラ、マルロー、デュマ）と比較すれば、この小説家は私たちには知られていない。事実、日本語で執筆されたフランス文学史には名前が見られない⁶。この作家は、しかし、エマニュエル・マクロン大統領によって、フランスを代表する人物として聖別されることが決まっている。その経緯や意義については、カンパ氏の講演が詳らかに

1 *Poètes de la Grande Guerre. Expérience combattante et activité poétique*, Paris, Classiques Garnier, coll. « Études de littérature des XX^e et XXI^e siècles », 2010.

2 *Guillaume Apollinaire*, Paris, Gallimard, coll. « NRF Biographies », 2013.

3 *Album Cendrars*, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2013.

4 アポリネールの伝記については日本語で書評がでている。森田いく子、「Laurence Campa, *Guillaume Apollinaire*, Gallimard, « Biographies / Gallimard », 2013, 819 p.」、『仏文研究』（京都大学）、45号、2014年、89-144頁。

5 カンパ氏は、第一次世界大戦百周年記念行事（Mission Centenaire 14-18）の委員を務め、ペロンヌ大戦歴史博物館の学術委員会にも所属しており、第一次世界大戦と作家たちの関係について関心を深めている。

6 饗庭孝男・朝比奈誼・加藤民男編、『新版フランス文学史』（白水社、1992年）および田村毅・塩川徹也編、『フランス文学史』（東京大学出版会、1995年）、そして柏木隆雄 [ほか] 編、『エクリチュールの冒険：新編・フランス文学史』（大阪大学出版会、2003年）を参照。

している。

ここでは、講演の内容と重複する部分もあるが、ジュヌヴォワ作品の抜粋とともに簡単にこの作家を紹介してみたい。モーリス・ジュヌヴォワは1890年11月29日にニエール県のドシーズに生まれた。1891年には母の故郷にあたるロワレ県のシャトーヌフ・シュル・ロワールに移り住む。1911年パリ高等師範学校（エコール・ノルマル・シューペリユール）に合格。一年の兵役を経て入学する。1914年、論文「モーパッサンの小説におけるリアリズム」によって高等教育修了証書を獲得。翌年には教授資格試験（アグレガシオン）を受ける予定であったらしい。しかし、8月2日、大戦勃発に続く総動員令が発せられたことにより、事態は一変する。ジュヌヴォワは、ただちに第106歩兵連隊に入隊。1915年にはマルヌの戦いを経験し、ヴェルダンに向かう途中、2月からレ・ゼパルジュで過ごす。この経験をジュヌヴォワは、日記につけていた。その後、4月25日、3発の銃弾により負傷する（抜粋1を参照⁷⁾。7か月の入院の後、その負傷が原因で除隊。ジュヌヴォワが戦地で綴って持ち帰った記録を高等師範学校の書記ポール・デュピュイが読み、出版社に紹介された。これをきっかけに、『ヴェルダン戦線』が執筆されることになる（1916年5月に刊行）。1917年には『戦争の夜』、1918年には『塹壕の入口で』、1921年には『泥』そして1923年に『レ・ゼパルジュ』を発表し、これらが後に一冊の書物として『14年の人々』を構成する。カンパ氏の講演が主な対象とするのは、ジュヌヴォワによるこれらの一連の戦争ものである。

1925年にはロワレ県の森林地帯を含むソーニユ地方を舞台に密猟者の生活を描いた『ラボリオ』を発表し、ゴンクール賞を獲得している。この作品はジュヌヴォワの代表作の一つで、20世紀初頭に流行した「地方主義」の潮流に位置づけられる（ラミュ、ジャン・ジオノ、そしてアンリ・ボスコなどともに）。ジョルジュ・サンドという始祖をもつこのジャンルは⁸⁾、地方で「素朴な」生活を営む民衆を賞賛する。また、その土地で使われる独特の言い回しを小説に取り入れることにより生き生きとした話し言葉が作品に豊かさをもたらすと考えられた⁹⁾。確かに、狩りについては、ジョルジュ・サンドやモーパッサンも小説の題材としている¹⁰⁾。しかし、『ラボリオ』で示されるのは、地方住民の善良さやジャルゴンだけではない。主人公ラボリオが愛犬アイシャとともに獲物を追う場面（抜粋2を参照）とジュヌヴォワの戦争ものとを比較してみて

7 本稿の最後に抜粋を付す。すべて拙訳。

8 モーリス・ジュヌヴォワはジョルジュ・サンドの伝記に序文を寄せている。マリー＝ルイズ・ボンシルヴァン＝フォンタナ、『ジョルジュ・サンド』（持田明子訳）、リプロポート、1981年、7-8頁。

9 André Lagarde et Laurent Michard, *XX^e siècle. Les grands auteurs français*, Paris-Montréal, Bordas, 1962, p. 506-507 ; *Histoire de la Littérature française*, sous la direction de Daniel Couty, Paris, Larousse, 2000, p. 930 ; Michel Brix, *Histoire de la littérature française*, Louvain-la-Neuve, De Boeck, 2014, p. 321.

10 例えば、次の二作がある。George Sand, « Mouny-Robin » (1841), in *Nouvelles françaises du dix-neuvième siècle. Anthologie, textes établis, annotés, et présentés par Allan H. Pasco*, Charlottesville, Rookwood, 2006, p. 161-178. モーパッサン、「オオカミ」（1884、青柳瑞穂訳、『モーパッサン全集』第2巻所収）、春陽堂書店、1965年、412-416頁。

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ」

ほしい。戦争が露わにした人間の暴力性（殺戮、血、高揚）が、狩猟家ラボリオにも見出されるのではないか。

『ラボリオ』に見られる暴力による恍惚という主題は、前年に発表された『オリンピックの勝者エウテューモス』にもすでに表現されていた。1924年のパリ・オリンピックを契機に書かれたこの歴史小説は、古代オリンピックを史料の読解によって忠実に再現しようとする試みとして知られ¹¹、例えば考古学者によって発見された徒競走のスタート地点の溝を描写していることからその正確性が見て取れる（抜粋3を参照）。ところが、拳闘家エウテューモスがライバルのテオゲネスを叩きのめすときに見せる抑制された喜び（抜粋4を参照）は、どこか敵兵を殺戮する兵士の熱狂を連想させもする。第一次世界大戦が輩出した戦争の証言者は、このような形で物語の作家へと転身していった。

ゴンクール賞受賞によって脚光を浴びたジュヌヴォワは、戦時下の検閲により削除された部分を補填した完全版を1920年代後半に再出版しているが、それは大きな反響を呼ばなかった。1929年、ギュスターヴ・ランソンは、「大戦は働き盛りの作家たち(…)を変化させはしなかった」とし、これらの作家たちの作品は危機に瀕したときに人間が示す普遍的な様相を描いているに過ぎないと述べている¹²。1936年にアルベル・ティボーデが「戦争小説は三つの大きな成功作品を得た」として戦争ものを評価しているが、そこで挙げられているのはバルビュスの『砲火』、ドルジュレスの『木の十字架』、デュアメル『殉難者』で、ジュヌヴォワの名前は見られない¹³。ジュヌヴォワの転身のひとつの要因としては、カンパ氏が指摘するように戦争ものの流行が過ぎ去り、その多くが忘れられていったことにあるのかもしれない。

ところが、第二次世界大戦後のジュヌヴォワは、1949年に上述の戦争もの5作品を一冊の書物にまとめ、『14年の人々』と題して発表する。既に述べたように、検閲により削除された部分を補填した完全版は1920年代に出版されていた。しかし、この完全版には、ジュヌヴォワ自身により削除された箇所があったことは本人が1946年に認めるとおりである。ドイツ兵3名を射殺する短い記述である（抜粋5を参照）。1916年に検閲により伏せられ、1925年に作者自身によって隠ぺいされたこの短いパラグラフは、30年以上経った1949年にその経緯とともにジュヌヴォワによって読者に届けら

11 この点については次の本に紹介されている。ピエール・シャルトン、『フランス文学とスポーツ』（三好郁郎訳）、法政大学出版局、1989年、179-181頁。

12 ランソン／テュフロ、『フランス文学史』（有永弘人 [ほか] 訳）、中央公論社、1967年、III 巻、180頁。ジュヌヴォワが戦争から帰還したときに高等師範学校の校長を務めていたのがランソンで、ジュヌヴォワに学業を続けるように勧めたことが知られている。1953年の新版では、該当箇所を註をつけて、ジュヌヴォワの『14年の人々』に言及している。

13 アルベル・ティボーデ、『フランス文学史』（鈴木信太郎 [ほか] 訳）、1952年、ダヴィッド社、350頁。このような形で日本に紹介されたフランス文学史の影響は、「出征作家による証言型の戦争文学は、戦争がアクチュアリティを失うにつれて急速に読まれなくなった」とする久保昭博の著作にも見られ、その小著では現在読まれているのは『砲火』や『木の十字架』などわずかしかないと断じられている（『表象の傷—第一次世界大戦からみるフランス文学史—』、人文書院、2011年、56-57頁）。

れることになる¹⁴。その事情を知らずに読めば、なぜそこまで拘泥したのかと考えさせられるほど簡潔な描写ではある。しかし、発表の経緯を知ると、この射殺がいかにもジュヌヴォワの中で重石となっていたのが了解される。第一次世界大戦後に「戦場から帰還してくる兵士たちが押し黙ったままで」いたことを指摘したヴァルター・ベンヤミンは、その理由を「ここまで徹底的に、経験というものの虚偽が暴かれたことはなかった」からだとしている¹⁵。ジュヌヴォワは、その「経験」を一度は戦争ものとして語ろうとしたものの『ラポリオ』や『エウテューモス』というフィクションによって迂回せざるを得なかった。作家が極限状態で書きつけた「経験」は、沈黙と迂回を経なければ、真実としては語れなかったのかもしれない。

では、戦争作家であり続けたモーリス・ジュヌヴォワの方法と主題はいかなるものなのか。同時代の作家マルセル・プルーストとのエピソードから、まずはその方法を確認する。1916年に『ヴェルダン戦線』を出版したジュヌヴォワはゴンクール賞の候補となるも受賞を逃している（受賞したのはバルビュスの『砲火』だった）。その3年前の1913年、『スワン家の方へ』を発表したプルーストの名前がゴンクール賞の候補として挙がっていた¹⁶。その後、プルーストは1919年の『花咲く乙女たちの陰に』で同賞を受賞し、前述のようにジュヌヴォワは1925年に『ラポリオ』で受賞することになる。このように二人は、戦前・戦中、新興の文学賞の候補者として文壇での地位を確立しつつあった。

そのような中、二人の人生が交わる「事件」が起こる。1920年、プルーストは若手作家に奨学金を与えるブルメンタル基金の審査員となった¹⁷。この年の秋ジャック・リヴィエールの授賞のために奔走したとされている。2年後の1922年、同賞の候補者として、プルーストはバンジャマン・クレミウとジョルジュ・ガボリを推薦した¹⁸。しかし、この年に選ばれたのはモーリス・ジュヌヴォワだった。ジュヌヴォワが9票を得たのに対して、クレミウは7票、ガボリは4票だったと同じく審査員であったアンドレ・ジッドが証言している¹⁹。

一見些細なエピソードにすぎないこのプルーストがくださった判断は、しかし、『見

14 この経緯については、以下を参照。Michel Bernard, « Préface », in *Ceux de 14*, Paris, Flammarion, coll. « GF », 2018, p. 9-27.

15 ヴァルター・ベンヤミン、「経験と貧困」（1933、浅井健二郎訳、『ベンヤミン・コレクション2』所収）、ちくま学芸文庫、1996年、373頁。

16 Thierry Laget, « L'attribution du prix Goncourt à Marcel Proust », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 14, 1983, p. 64.

17 ブルメンタル基金については、以下を参照。Pyra Wise, « Dix lettres inédites de Marcel Proust retrouvées au Kentucky », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 34, 2004, p. 13-42.

18 この経過については、以下を参照。ジョージ・D・ペインター、『マルセル・プルースト—伝記』（岩崎力訳）、筑摩書房、1972年、下巻、347-348頁。

19 1922年6月16日金曜日の日付がついたアンドレ・ジッドからマルセル・プルーストへの手紙を参照。次の書簡集に収録されている。*Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Paris, Plon, 1993, tome XXI, p. 286-287.

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ

出された時』のある一節と結びつけることで、ジュヌヴォワの理解に役立つものである。第一次世界大戦を経た『失われた時を求めて』の主人公が導き出す「記録の文学」への批判を含む一文を読んでみる。

記録の文学には、なんらかの価値があるのだろうか？ というのも、それが記録するこまごまとしたものの下にこそ現実が含まれているのであり（遠くを過ぎる飛行機の音の大きさ、サン＝ティレールの鐘塔の線の偉大さ、マドレーヌの味に含まれた過去、など）、その現実を引き出さないかぎり、これらのこまごまとしたものだけではなんの意味もないからだ²⁰。

ここで言われる「記録」(notation)とは、時間をかけて生み出される「描写²¹」であるというよりは素早く記される「メモ書き²²」のことである。

「記録をとる」(noter)という方法は、ある種の文学流派の特徴であった。ここではプルーストが『見出された時』で批判の対象とした『ゴンクールの日記』の一節を引いておきたい。

わたしたちの努力は(…)同時代人を、生き生きとした姿のままで蘇らせようとするにであった。そのためにこそ、会話を夢中で速記したり、人の仕草の生理的特徴をとっさにとらえたり、個性がおのずとあらわれてしまうその人のちょっとしたことへの情熱、そして人生の緊張をもたらすあの何かをとらえ、つまりは人を陶然とさせるパリの生活特有のあの熱気をいささかなりともとらえて記録(notatation)したのだ²³。

この1872年にエドモン・ド・ゴンクールによって書かれた序文がプルーストに「記録の文学」を批判させることになったのだろうか。ありそうなことではある。ところが、同時代の作家アンドレ・ジッドもべつの作家に対して、「記録」するその方法に疑義を呈しているのだ。「マルタン・デュ・ガールが推奨するメモとカードにたよるやり方が私にとって役立つか」というと、それはおぼつかない。記録された思い出(souvenir noté)が精緻であるために、かえって彼は拘束されている。彼はともかく、少なくとも、私にとっては邪魔になるだろう²⁴。このジッドの創作ノートを読むと、

20 マルセル・プルースト、『見出された時』(鈴木道彦訳)、集英社文庫、2007年、1巻、422頁。

21 この点については佐々木健一の「現前化・描写など」についての説明を参照(『レトリック事典』、大修館書店、2006年)。特に589頁に notation の説明がある。

22 この点についてはロラン・バルトが『小説の準備』の中で小説執筆の端緒になる行為として「メモ書き」について詳しく論じているが、そこにプルーストの名前も挙げられている。『小説の準備』(石井洋二郎訳)、筑摩書房、2006年、31-34頁。

23 『ゴンクールの日記』(斎藤一郎編訳)、岩波文庫、2010年、上巻、11頁。

24 アンドレ・ジッド、『『贗金づくり』の日記』(二宮正之訳、『アンドレ・ジッド集成』第IV巻所収)、筑摩書房、2017年、412頁(1921年1月1日の記述)。

「記録」に対する執念とそれに対する批判は時代の潮流だったことが確認できる。

その点を踏まえたとて、『見出された時』の一節のもとになった下書きを読んでみる。1913年から1916年の間に書かれたと推定されている「記録について私が話すときのために」と書かれたこの断片では「記録」(notation)よりも「翻訳」(traduction)こそが我々の使命であるとされている。その上で、作家の使命を蔑ろにし、「大衆の作品を書いたり、民衆を啓蒙したり、戦時に民衆を支えたり、民衆が理解できるような言葉で彼らに話しかけたりする」行為が批判の対象となっている²⁵。「戦時」とあることから、ある種の戦争文学がプルーストの念頭にあったことは間違いない。ブルメンタール賞の審査員を務めたプルーストがジュヌヴォワの戦争ものを確実に読んでいたという証拠は残念ながら残されていない。しかし、「記録の文学」というときのプルーストは、前線で認めていたメモ書きをもとに書かれた作品を想定していたと言うことは許されるのではないか。プルーストの批判を読むことで、「記録する」という伝統的手法こそがジュヌヴォワの戦争ものを特徴づけていることがより一層明確になる。

前線での経験を瞬時に記録した『14年の人々』のジュヌヴォワと銃後のパリで何度も書き直された『失われた時を求めて』のプルーストでは、戦争に対する視点が異なっているのは当然である。だが、「銃後の作家プルーストの狙い」と「前線の戦闘体験を『証人』として語る作家のそれ」を並べるのは「ナンセンス」なのだろうか²⁶。

二人の作家は同時代を生き、同じロワール川周辺の空気を吸って成長し、戦争を乗り越えていったこともまた事実であって、共有する関心がないと考えるのは不自然だろう。最後に、プルーストとの比較から、ジュヌヴォワが主題として取り組み続けた「記憶」について触れておきたい。プルーストが上の一節で引き合いに出すとおり、「鐘塔」はマドレーヌと並んでコンブレで過ごした少年時代を喚起するものであり、過去へいざなう役割を果たす。そこで想起されるのは、例えば次のような村ののどかな情景のはずである。

私たちは水辺のアイリスのあいだに腰を下ろすのだった。祭日の空をのろのろと、一片ののどかな雲がうろついている。(…)サン＝ティレールの鐘の音が、水平に、かすかに、だが相変わらず密度のある金属的な響きで聞こえてくるのだった。それは長いことかかって空中を横切ってくるのだが、空気に混ざりあってしまうこともなく、(…)花とすれすれに私たちの足許で震えていた²⁷。

25 N.a.fr. 16697, f° 42, v° (Marcel Proust, *Matinée chez la Princesse de Guermantes*, Paris, Gallimard, 1982, p. 384).

26 坂本浩也、『プルーストの黙示録 『失われた時を求めて』と第一次世界大戦』、慶應義塾大学出版会、2015年、158頁。

27 マルセル・プルースト、『スワン家の方へ』(鈴木道彦訳)、集英社文庫、2006年、第1巻、361頁。

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ」

同じようにジュヌヴォワにとっても「鐘塔」は過去を呼び起こすものである。過去を思い出させる重要な道具としての「鐘塔」に言及する一節を引いて、この解題を閉じたい。

ロワール川のほとりに私は一人でいました。すると、休戦を告げる鐘の音がいくつもの鐘塔から谷を越えて鳴り響いてきました。秋も深まったある一日のことです。日がやさしく輝いていました。かすかに乳色をした霧によってわずかにおおわれた青い空、そして、青い水が、葉々の赤茶色とその川面での反映にそっと触れていました。なんたる安らぎ！ 満ち満ちる平穏！ 鐘は、場に君臨し消えることのない沈黙のなか響いていました²⁸。

ここでのモーリス・ジュヌヴォワは、マルセル・プルーストのように、ロワール川近郊の村で過ごした過去を想起することに情熱をかたむけている（鐘、川、空という共通のテーマがうかがえる²⁹）。

第二次世界大戦後の作家は、暴力の後に訪れる沈黙を生き、小説を通して過ぎ去った時を求めている。プルーストは他者を理解することの不可能を通じて徹底的に「私」にこだわり、個人に偶然おとずれる「無意志的想起」を待ち続けた（仮にそれがおとずれないとしても、プルーストはよしとしているように思える）。それとは対照的に、ジュヌヴォワは「記録された思い出」を通して集団が抱える「対立を乗り越える」（ロランス・カンパ）可能性を信じ続けたのである³⁰。

28 Maurice Genevoix, « Souvenirs », *La Revue française*, n° 13, 25 novembre 1948 (article recueilli dans *La Ferveur du souvenir*, édition établie et présentée par Laurence Campa, Paris, La Table ronde, 2013, p. 85).

29 鐘の音については、例えば、シャトーブリアンが『ルネ』で次のように述べている。「故郷の鐘の音がわれわれを誘ひ込むこの楽しい夢想の中に一切があります。宗教も、家庭も、祖国も、或は揺籠も、墳墓も、また、過去も未来も」（シャトーブリアン、『アタラ ルネ』（1802、畠中敏郎訳）、岩波文庫、1957年、140頁）。文学的トポスとしての鐘の音については、次を参照。アラン・コルバン、『音の風景』（小倉孝誠訳）、藤原書店、1997年。

30 そこには「フランス人」とその他者である「テロリスト」による「対立」という発想は乏しい。

抜粋1：1915年4月24日、部隊はリュ村に移動する。翌日、塹壕を調査しているときに、モーリス・ジュヌヴォワは左腕、そして、脇の下を負傷することになる。

もう一度、私は前線の端から端まで歩いた。仲間の狙撃兵たちには、同じことを繰り返し注意した。「やつらに撃たせておくんだ。身を守るのが先だ。森は見通しがいいから、やつらが前進すれば見えるだろう。見えるまでは撃つな。弾を無駄にするんじゃない。」前線の右端に到着し、真ん中に戻るときだった。一人の若い兵士が死んでいた。そこから数歩のところ二人の男がいて、私がそちらに歩いていくと、振り返った。彼らは手をさげて私に合図を送っている。「身を守るんだ。」私は彼らの近くまで行って、叫んだ。「どうしたんだ？ 身をかかめるんだ。すきまがある。見えている！」

遅かった。私は地面に膝をついていた。きつくするどい一撃が左腕を打ち、腕は後ろに跳ね上がった。血がとぎれとぎれに流れた。腕をもとの位置にもどうそうとしたが、できなかった。立ち上がろうとしたが、やはりできなかった。腕を見ていると、二発目の衝撃で、はねあがった。べつの穴から血が噴き出した。膝は地面にのめりこんでいく。体が鉛のように感じられる。顔が下がっていく。目の前の布切れが、三発目の銃弾で飛び散った。茫然として、胸のあたりを見ると、左側のわきの下のあたりの肉が赤くえぐれていた。起こして、移動させよう。サンスワの声だろうか？ 運んでくれているのか？ 意識は失っていなかった。息をはくと短く甘いしゃがれ声もれた。淡い薔薇色と淡い緑色のまざった空に、樹々の先端がぐるぐると回っていた。

退避壕は暗かった。私の周りでは人々がせわしなく動いていた。シャブルディエ、レオスティック、エヴェイエ、ムノはのぞきこみ、しかし、触れはしなかった。離れていってはまた戻ってきて、何回も「シュ！ オッ！」と言うのであった。単調で悲しそうな声だった。彼らは私の服をさいた。血が流れているわきの下に、止血用タンポンをあてがった。日のあたる扉のあたりに彼らの姿が行き来している。

(*Ceux de 14*, Paris, Flammarion, coll. « GF », p. 852-853).

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ」

抜粋2：物語の主人公ラボリオは愛犬アイシャと狩りをしている。

「行け、行け！」

ラボリオは犬を放した。犬は全速力で駆け、金網に沿って走り回った。すぐに、あらゆる方向から狂ったように踏み鳴らす足音がかすかに聞こえてくるのだった。突然、爪でひっかくような音、そして細く鋭い叫び。ラボリオは犬のほうへ歩いて行った。黒い犬は、金網のところで丸くなっており、爪を地面に立てていた。あえぐ兎を口にくわえている。

「行け、行け！」

アイシャはあごの力をゆるめた。犬はすでにつきへと向かっていた。ラボリオとは言えば、兎の脚と耳をそれぞれの手でもつと、ぎゅっと引っ張って、背骨を折ってしまった。すぐにまた再開だ。でたらめに逃げていく兎を追って犬が金網にぶつかり、スピードを緩め、地面を掘る。その音がかすかに聞こえる。そして、捕まった兎の鋭い叫び。ラボリオは走らなかった。犬についていくのだけで精一杯だったのだ。しかし、犬がとびかかろうとする地点を予測することはできた。犬が獲物の毛にかみつこうとするそのとき、ラボリオの手はすでに兎をとらえているのだった。ラボリオの布袋には、まだ温かい死骸が積み重なっていった。紐は重さで首を強く引っ張り始めていた。

「行け、行け！」

素晴らしい夜だ。うまくいったぞ！ 悪魔が黒犬に宿っているようだ。奇妙なくらいおとなしいかと思うと、あちこちを歩き回り、突然矢の如く突き進む。野原を突っ切って、まるで鬼火のように突進するのだ。ときどき振り返って、ラボリオは西の方を見るのだった。森番の家があるラ・ソヴァージュールの方だ。その間も、手をやすめることはなかった。脚をばたつかせる兎をアイシャの口からとりあげ、耳と脚をつかむと引っ張る。すると、脆い背骨がぼきと音を立てる。獣は動かなくなり、まるで生温かいぼろ着のようにぐったりとする。袋行きだ！ もう七羽が八羽は入れたな。黒犬はあいかわらず走り回っている。ラボリオは、低く強い声を齒の間から勢いよく出して、犬をけしかけた。

「行け、行け！」

ときどき、腰のあたりで金網がきしんだ。小さいけれども、錐のように鋭い声が、あちらこちらで鳴り響く。ラボリオは有頂天になって、つぶやいた。「きいっとさけぶな、ちくしょう、きいっとさけぶな。」これ以上のものがあるだろうか。これ以上のものがありうるのだろうか。ラボリオは、暗闇のなか狩りを続けた。アイシャのあえぎが聞こえる。熱を発しているような黒っぽい形が見える。そして死をもたらす跳躍。きいっきいっと苦しむ叫びが聞こえるたびに、それは体の奥まで響いた。心臓がときどきとした。袋行きだ、袋行きだ！

(Raboliot (1925), Paris, Librairie Générale Française, coll. « Le livre de poche », 1989, p. 51-52).

抜粋3：オリンピアの競走。

「位置について！」

彼らは4人ずつに分かれて走る。それぞれの組の勝者がまた4人ずつ走る。最終レースで、最初にゴールに達した勝者は、比類ない栄光を得ることになる。オリンピック参加者のなかで一番有名になり、幾世紀もの間、オリンピアードが彼の名で呼ばれることになるからだ³¹。

「位置について！」

最初の4人がスタート位置につく。

準備よし！ 青年たちの声が響く。

彼らが身体を前かがみにするのが見える。上半身を地表と平行になるようにし、美しい弓のように少しだけたわませている。彼らの力は、深い波のように生れ、積もっていき、硬くなる。それが脚を緊張させ、熱したレンガの溝を足指でつかませる。心臓の鼓動とともに、新しい力の波が、彼らを高揚させるいくつもの波に加わる。すぐに彼らはそれらをまた抑え込む。

高らかにトランペットが響く。スタートだ！ 彼らは一塊になって太陽のもと走る。足下には、塵の塊が現われる。彼らは走る。まるで宙に浮いているかのように。重力から自由になって、全員が神の速度を備えた翼に運び去られ、身体は滑翔する。彼らを見ている観客も彼らとともに滑翔する。あらゆる不幸、あらゆる病苦、あらゆる悍ましきは、一瞬で忘れ去られる。そこにあるのは太陽の輝き、褐色のトラック、俊敏な身体の伸長だけ。黒い斑点が頑健な膝の裏にできるくぼみで生まれては消える。宙を後ろへ後ろへと蹴る踵は、胸の突進を助けるために、大気を押しこむことで推進力にかえている。胸は、ぴんと張られ、鼓動とともに前へと押しやられる。腕の運動は、讚嘆すべき脚が繰り出す飛翔を光のもとで繰り返している。

もっと速く！ 人々は走者がゴールすることを望みながらも、この競走に終わりが来ないように切望する。観衆は痙攣し、喘ぎだす。この燃えるような美しさのスペクタクルによって自然と熱狂する。興奮は一気に絶頂に達し、奇跡的にその状態をとどめている。

終了。身体の前へは、踊るような最後の数歩のうちに和らいでいく。ところが、すでにべつの4人の走者が柱の間で位置につくと、トランペットの音とともに駆け出している。またしても燃え立つ太陽のもと、奇跡が繰り返される。この競技の魔力はオリンピアの巡礼者の心をとらえた。5日間、彼らはその熱狂に酔い続けるだろう。彼らの生は尽きることはない歓びの泉となる。苛酷な季節であることを忘れさせるアル

31 古代ギリシアではオリンピアの祭典が4年ごとに行われ、4年間を暦の1期（オリンピアード）とした。

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ

ペイオス河³²、その聖なる岸辺には、4万人の神が集うのだ。

(*Euthymos : vainqueur olympique*, Paris, Union Générale d'Éditions, coll. « 10|18 », 1969, p. 166-168).

32 オリンピアのそばを通るエーリス地方の河（マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル、『ギリシア・ローマ神話事典』（1973、西田実 [ほか] 訳）、大修館書店、1988年）。

抜粋4：エウテューモス³³対テオゲネス³⁴。

野生の亀を攻撃する隼のように、旋回し鳴き声をあげながら爪を広げて襲い掛かる。硬い甲羅を打ち、さらに攻撃しようと舞い上がる。しかし、テオゲネスがどれほど激しい攻撃を繰り出しても、エウテューモスは平然としていた。テオゲネスの瞳には心の動揺が透けて見え、徐々に繰り出す拳骨も弱まっていった。エウテューモスが攻撃を防ぐと、その身体はまるで大木のように踵から項まで震えるのだが、しゃんとした姿勢は保たれていた。テオゲネスの胸に汗が流れている。額は汗だくになり、頬を伝っていくのが見える。怒りにとらわれ分別を失ったテオゲネスが逆上して叫ぶにいたり、エウテューモスは嬉しくなるのだった。

「くそ」と大きな声で彼は言った。「歯をへし折って吐き出させてやる。お前の鼻は、熟れた柘榴のように、ぐちゃぐちゃにつぶすからな。血まみれだぞ！」

エウテューモスにはギリシア人たちの罵声が聞こえた。しかし、かつてないほど感情を制御していると自覚した彼は、動揺もせずたじろぐこともない。テオゲネスの瞳にはその心を満たす苦痛が映し出されている。このタソス島人の腕が疲れ、これ以上拳を突き出せないくらい重たく感じられるようになる瞬間は近づいている。「できる限り待つことにしよう。」一度、そしてもう一度、隙があると見て取ったエウテューモスは、寸でのところで飛び掛かって拳固の力を解き放つところだった。しかし、彼はまだ自分を抑えることができた。

ついに、ついに！ ミロン³⁵は無言で丘の麓に移動した。彼の眼は、瞬く間にその弟子を前方にとらえた。ちょうどテオゲネスが飛び掛かろうとしていて、エウテューモスは、市門を叩く槌よりも激しく、右の一撃を繰り出すところだった。テオゲネスの荒々しい突進がその一撃の力を二倍にした。ギリシア人たちは彼の頭が後方にはじけ飛ぶのを見た。距離は離れていたが顎が鳴るのを聞いた。テオゲネスはふらつき、敵の攻撃から身を守ろうと、エウテューモスの身体に自分の身体をあずけ、その筋骨隆々の肩に頭をもたせかけた。しかし、エウテューモスはわきの下をつかみ、押しつけ、喜んででもいるかのように闘いを続けさせようとする。

「島々のギリシア人よ、家の中庭にいる女たちよりもおしゃべりなお前を怖がるだと？ 色白でかわいいこと！ 撫でてやればすぐに薔薇色か…。おやおやどうした？ アフロディーテの名において、お願いするぞ、泣かないでくれと！ おまえの涙はおれを苦しませるのだから。」

実際、テオゲネスの眼には涙が光っていた。歯をかみしめ、その力を雄々しく取り

33 中央ギリシア・ロクリスの人ですぐれた拳闘家（高津春繁、『ギリシア・ローマ神話事典』、岩波書店、1960年）。

34 ギリシアの島タソス出身の拳闘家。別種の格闘技パンクラチオンや長距離走も得意とした（David Matz, *Greek and Roman Sport: A Dictionary of Athletes and Events from the Eighth Century B. C. to the Third Century A. D.*, Jefferson, McFarland, 1991）。

35 イタリア・クロトン出身のレスリング選手（前掲書）。

ロランス・カンパ「感謝せる祖国、14年の人びとにこれを捧ぐ

戻そうとする。だが、突然、ロクリスの人唇は血に染まり、口中が緋色の泡で一杯になった。エウテューモスは唾を吐き、笑い出した。なんでもない！ 闘い始めたときにこれぐらいの一撃をかましておけば早々に勝利を得ることができたのにと考えながら、それでもじっと我慢してきた自分に満足していた。勝利だって？ すでに俺のものじゃないか。勝利ははるかなる青空に飛び立ち、華々しい名誉をそびえさせている。今となってはこの勝利に向って彼は突進する。拳骨で打つのだ。この白い身体を。立っている、まだ立っている、倒れそうになりながらも、まだ立て直そうとするこの身体を打ちつけるのだ。

(*Euthymos : vainqueur olympique*, Paris, Union Générale d'Éditions, coll. « 10|18 », 1969, p. 186-188).

抜粋5：モーリス・ジュヌヴォワの部隊は1914年8月に出発した。いくつかの戦闘を経たのち、ヴェルダン近くのヴォ＝マリでマルヌの戦いに参加する。9月11日の記述。削除されたのは、最後の一段落。

突然、強烈な一斉射撃が起こった。信じられない速度で、どンドンと近づいてくる。すどい爆発音が続く。間違いなし。^ボドイツ野郎^ンの射撃だ。我々は攻撃されているんだ。

「全員、立て！ 立て！ さあ立つんだ！」

私は近くで寝ている伍長を揺さぶった。小隊全体に、藁のがさごそという音がしばらく続く。次に、銃剣のかちかちという音。その後で、ボルトのガチャガチャという音がする。(…)

「さあ！ さあ！ 前進！」

いったい何人の兵士たちが同時に叫んだのか？ 柔らかな土は軍靴の衝撃音で震える。我々は殴られ、踏みにじられ、粉碎される。60人しかいないんだ。たった一列の横隊が我が戦線を間伸びさせるに違いない。我々は、水牛の大群のように突き進んでくるこの兵列に抗することはできまい。

「撃て！ 撃て！」

(…)

叫び声が戦線に響く。こうなったら打つ手は一つだ。後方にある猟兵大隊の塹壕に逃げ込むのだ。大声で命令を出す。叫ぶ。

「飛び越えていけ！ まっすぐだ！ 飛び込め！」

(…)

雨が顔に打ちつけていた。泥が靴底にまとわりつく。快活な歌のような音を立てて、弾丸は頭の上を飛び越え、目の前に着弾する。

一人のフランス人が飛び跳ねながらうめいた。

「レティ、お前か？」

「はい、中尉。腿に一発やられました。」

「頑張るんだ、もうすぐそこだ！」

すでに、唸り声をあげるものはいなくなっていた。兵士たちは攻撃にうつろうと再編成されたに違いない。私はヘルメットを脱ぎ捨て、左手に持っていたケピをかぶりなおした。

猟兵を集合させようとしたが、その前に私は部隊からはぐれたドイツの歩兵3名に向かって行った。それぞれの後ろに回り込んで、頭や背に拳銃の弾を撃ちこむ。彼らは3名とも息を詰まらせたような叫び声をあげ、倒れた。